

## 大蔵谷宿に関するフィールドワークの参加報告

神戸学院大学人文学部 福島 あずさ

2021年7月30日(金)、あかし教育研修センター社会科研修講座主催で、大蔵谷宿に関するフィールドワークが実施された。フィールドワーク後の「まとめの会」の開催会場として、明石ハウスをご利用いただいた。

本フィールドワークは、明石市文化財保存活用協議会副会長で、本学に非常勤講師としておいでいただいている森本眞一氏の企画により開催されたもので、明石市内の小学校・中学校の教員11名、明石市歴史文化財係の須貝氏、明石市文化博物館学芸員の義根氏、兵庫教育大学南埜猛教授に加え、神戸学院大学の学生2名と人文学部の矢嶋巖准教授、筆者が参加した。

本フィールドワーク実施のきっかけは、筆者が森本先生にゼミ生の卒業研究(本報告書31～40頁にて詳細を報告)へのご助言をいただいた際、大蔵地区の歴史・地理を活かし、学校教育との連携を図れないかという点に議論が及んだことである。明石市では現在、明石市文化財保存活用地域計画作成の最中であり、大蔵地区についても地域に残る歴史的資源をいかに保存・活用していくかが議題になっているとのことであった。森本先生は元小学校校長のご経歴を持ち、教育を通じた文化・歴史の継承や普及という点でご助言をいただくには適任であり、幸いにも今回このような機会を設けていただくに至った。

当日は、神戸史学会会員で明石市史の編さん等に長く携わっておられる宮本博氏の案内で、8時半～12時半ごろまで、明石駅から旧大蔵谷宿までの史跡を巡った(写真1)。明石城の外堀から道路元標、西国街道、道標、鍛冶屋町跡、外堀跡と白雲桜の碑、京口門と番所跡、東新町、子午線通過識標、両馬川跡碑、忠度塚、腕塚神社を巡ったのちに、旧大蔵谷宿に入った。大蔵谷では、休天神、大蔵院、稲爪神社、本陣と脇本陣跡、西林寺、大蔵八幡神社と巡り、明石ハウス周辺の明石市都市景観形成重要建築物3軒をみて、最後は明石ハウス内で「まとめの会」を開催した(写真2)。

宮本氏の案内では、道標の位置の変遷や、古地図で見た明石城下町や街道筋の変遷が詳細にわたって解説され、時代を超えて現在もその遺構がこれだけの残されていることに驚きの連続であった。また道標の向きや位置は、移設時の工事の都合等で、不適切な向きや位置に移設されているものも少なくないことなど、裏話にも事欠かなかった。さらに、城下町と大蔵谷宿の境目となった両馬川が、現在は暗渠化されていてほぼ認識されていないこと、その近隣には平家の武将で歌人でもあった平忠度の亡骸を埋めたと伝わる「忠度塚」、右腕を埋めたといわれる「腕塚神社」があることなどは、新たな明石の歴史的価値の可能性を示唆する要素でもあった。旧大蔵谷宿では、参勤交代の大名らが休泊する際に、庶民らが利用する「裏道往来」が今でも住民らに利用されていることや、八幡神社の南側には、幕末期に台場(砲台)が設けら

れていたこと（時間がなくこのあたりは詳細な解説が得られなかったが）、陶器や瓦の製造所が設けられていたことなどが解説された。

「まとめの会」では、参加者がそれぞれの感想を述べ、特に教員の方は教材化に向けた展望について話してくださった。子どもたちが実際に歩き回って見ることのできる史跡が身近に数多くあることは、教材化にあたってのハードルを下げ、なにより地元校区の教員にその事実を「知っていただく」ことで、活用の機会が広がることが拝察された。

なお、参加したゼミ生が、今回紹介を受けた歴史的資源の数々を「明石の観光資源」と捉え、卒業論文の中でも大きくページを割いて解説するに至ったことも、成果の一つと言えるかもしれない。

後日、社会科研修講座の世話人を務める石田誠教諭（明石市立沢池小学校）から、半日のフィールドワークの様子を収めた小さな写真集が手書きのお手紙とともに届いた。また、2022年2月22日には、同じく社会科研修講座の勉強会「大蔵谷宿の交流会」が開催される予定であり、本学から江島優貴さんの卒業研究「明石市大蔵地区の観光地化を考える～丹波篠山市福住地区と比較して～」を発表させていただくことになっている。

今回の交流の機会から、地域研究センターの活動の一環として、地域の学校教育との協働や支援を行うことができる可能性があることが示唆されたため、ぜひ今後の活動に結び付けられたらと考えている。



写真1 宮本氏による明石市道路元標の解説の様子（2021年7月30日 筆者撮影）



写真2 明石ハウスでの「まとめの会」の様子（2021年7月30日 筆者撮影）